

琉球大学学術リポジトリ

「考えること」についての覚書

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-04-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 道田, 泰司, Michita, Yasushi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/436

「考えること」についての覚書

道田 泰司¹

Some notes on “thinking”

Yasushi MICHITA

要約

「考える」(思考する)とはどういうことかについて、国語学者、哲学者、認知科学者、発達心理学者の論考を参考に考察した。それらの議論を暫定的にまとめ、各概念の関連およびその教育上の示唆を考察した。最後に、本稿に欠けているものとして、問いに答えるのではなく問いを問う思考について検討した。

1. はじめに

本稿の目的は、「考える」(思考する)とはどういうことかについて考察することである。「思考」や「考える」という語は、もちろん日常語として誰でも知っており、誰でも使っている言葉である(筆者の記憶では、筆者の娘が3歳のときに「何しているの?」と聞いたら、「かんがえてるの」と娘が答えたことがある)。しかし、いざ「考えるとはどういうことか?」と問われても、十分な答えを出せる人はあまりいないのではないだろうか。

まず本題に入る前に、国語辞典や心理学分野で「考える」がどのように定義されているかについて、簡単に確認しておく。広辞苑(第4版)を引くと、次の5点が「かんがえる」【考える・勘える・稽える】の定義として載せられている(例文は省略)。^①実情を調べた。吟味する。^②糺明して罪する。勘当する。^③思考をめぐらす。あれこれと思量し、事を明らかにする。思案する。^④易などによって事を判断する。^⑤学ぶ。学習する。

このうちの^②(糺明して罪する)、^④(易などによって事を判断する)、^⑤(学ぶ)は、我々が日常で使っている「考える」とは異なると思われる。^③(思考をめぐらす)は、「思考」という語そのものが定義に使われており、考える(=思考する)ことの意味を具体的に理解する上での助けにはならない。残る^①のうち、「調べた」については、「調べる」ことが考えることとイコール(あるいは必ず含まれる)というのは日常感覚にそぐわないように思われるし、「吟味する」に関しては、吟味の中身が具体的にない限り、考えるという語を別の語に置き換えただけで、具体的な理解にはつながらないであろう。どうやら国語辞典では、「考える」という語の意味を考えるうえで、あまり役に立たないようである。

心理学においても、考えるということがどういうことかについて、明確な合意はないようである。たとえば市川(1996)は、「思考」の定義は研究者により必ずしも一致していない(p.1)と述べている。なお、それに続けて「一般には、ある状況にたいして反射的に反応するのではなく、複雑な内的過程を経て判断や行動が行われることをさ

¹ 学校心理学教室 (michita@edu. u-ryukyu. ac. jp)

している」(p.1:強調は引用者)と述べている。とりあえずはこれを、考えることの暫定的な定義とみなしてもよいであろう。そしてここで問題にしたいのは、「複雑な内的過程」の中では具体的にどのようなことが行われているのか、という点なのである。

心理学の世界で「思考」が重要な研究領域であるにも関わらず定義が一致していないのは、おそらく「思考」を定義しなくても研究を行う上では支障がないからであろう。心理学で一般に思考は、演繹的推論、帰納的推論、確率判断、意思決定、問題解決、メタ認知、創造的思考など、思考の低位概念のもとに研究が行われている。そして多くの場合、特定の課題(たとえば4枚カード問題、タクシー問題など)が用いられている。そこでは、その課題を解く際に被験者は何らかの思考をしているはずだと考えているのであろう。そのため、それがどのような思考であり、他の課題を遂行する際の思考や日常的に我々が行っている思考とそれがどのような関係にあるのか(たとえば同じであるとか異なるなど)は、カッコに括られられたまま研究が行われるのである。

もちろんそこで用いられる課題は、単純な想起や反射では答えられない問題であるので、必ずここでは「思考」が行われているであろう。しかし、考えるということの内実や意味を明確にしなければ、これらの課題以外の問題を前にしたときの思考について、きちんと考えることは難しくなるのではないかと思われる。そうならないために、心理学の実験を通してのみ知られる思考ではなしに、日常的にさまざまな場面でさまざまな形で我々が行っている思考について考えるのが、本稿の目的である。

近年、学校教育において、知識の習得だけでなく、考える力を育成することが求められている。そこでは、心理学でよく使われるような課題が用いられているわけではもちろんない。ではそこで目指されている思考とは具体的にどのようなものなのか、そもそも考えるということがどういうことなのか、などが明確でなければ、考える力を育成するとは具体的にどういうことなのかや、何をもって考える力が育成されたかも明確にはならないであろう。

上記のように心理学では「考えるとは何か」という問題を議論されることはないようである。しかし心理学以外をみるならば、日常的に(あるいは教育上で)我々が行っているような思考について考察がまったくないわけではない。筆者が知る限りでも、思考や思考力育成教育を考える上で役立つような文献はいくつか存在する。そこで本稿では、日常的あるいは教育的な意味での思考を念頭に置き、考えるとはどういうことかについて、そのような文献を通して、筆者なりに考察を行った。なお、考えることに関する考察は、さまざまな分野でさまざまに行われていると思われるが、以下で論じるのは、筆者の視野にたまたま入った論考のみである。その意味で本稿は、あくまでも現時点における試論にすぎず、覚書的なものでしかないことをお断りしておく。

2. 比較と構成—「考える」と「思う」の違いから—

「考える」という語の意味について国語学者が考察したものとして、『日本語練習帳』(大野, 1999)がある。大野氏は、日本語がよく読めるようになり、よく書けるようになるためには、単語の形と意味に敏感になるべきだと述べており、単語に敏感になるための練習として、「思う」と「考える」の違いを検討している。

「思う」と「考える」は、場合によっては置き換えて使っても違和感のない。たとえば本稿の第三段落の冒頭の文章は、「このうちの②(糺明して罪する)、④(易などによって事を判断する)、⑤(学ぶ)は、我々が日常で使っている「考える」とは異なると思われる」と表現しても違和感はないであろう。

しかし、「思う」と「考える」を置き換えることが可能ではなく、ニュアンスが変わってしまう用例もある。大野氏が挙げている例としては、「今夜のごはんの献立を考える」というものがある(「今夜のごはんの献立を思う」とは言わない)。また、「思い知らせる」「思いとどまる」「思い浮かべる」「思いおこす」もそうで、ここには「考える」は使われぬ。また、置き換えることによって、日本語としておかしくなるわけではないけれ

ども、意味が変化してしまうものもある。「思いこむ」と「考えこむ」、「思い出す」と「考え出す」がそうである。

これらの検討を通して大野氏は、「思う」と「考える」のニュアンスの違いについて、次のように述べている。

「思い」とは、胸の中にある一つのことをいいます。これに対して「考える」とは、あれかこれか、ああするか、こうするかと、いくつかの材料を心の中で比べたり、組み立てたりすることです。／つまり、「思う」とは、一つのイメージが心の中にできあがっていて、それ一つが変わらずにあること。胸の中の二つあるいは三つを比較して、あれかあれか、こうしてああしてと選択し構成するのが「考える」。／〔中略〕「事柄を突き合わせてしらべる」のが「考える」の最古の使い方です。現在も、「企画を考える」とか「献立を考える」とか、あれこれ組み合わせるときに「考える」という。そこには「思う」は使いません。「明日の試験を思う」といったら、明日の試験のこと一つが心配で気にかかることになります。／〔中略〕それに対して、「考える」にはあれかこれかという比較の観念、あるいは組み立て、構成の気持が含まれている。(大野, 1999, p.6-8. 強調は引用者)

大野氏は、考えるとは、「あれかこれか」と「比べる」ことや、「ああしてこうして」と「組み立てる」ことであると結論づけている。またこの記述から、先の広辞苑の定義にみられた「しらべる」(しらべただす)ことが、「考える」の最古の使い方であることがわかる。

複数の選択肢を比較することは、確かに我々の思考活動の中ではよく行われていることである。特に「意思決定」がそうである。意思決定とは「一般にいくつかの可能な行動の選択肢から一つを選ぶこと」(繁樹, 1999)と定義されるように、「比較」が中心となっている。意思決定が「思考」と呼べるような知的に高度な作業であることを印南(1997)は、「意思決定とは、〔中略〕因果関係を判断し、将来を予測し、価値や好みに基づいて

評価するという、高度な認知活動そのものなのである」(p.32)と述べている。

また、あれこれ組み合わせることによって考える、ということも、日常で考えているときのことを考えると、納得のいくものである。例に挙げられている「献立」以外でも、文章を組み立てるときをはじめとして、何か新しいものを作り出すときには、確かに、複数の材料をどのように組み立てるか、という形で考えていることが多い。

国語学の本ではないが寺崎(2002)でも、「思う」と「考える」の違いについて書かれていたので、大野氏の考察と関連させながら、ここに紹介する。寺崎氏は大学史の専門家であるが、学生にレポートの書き方を教えるという実践報告的な論文の中で、この説明が学問的に正しいかどうかはまだ調べていないと述べながら、レポート上での「思う」という表現について、次のように述べている。〔レポートを書く際には〕「——「とと思う」という主観的な言葉は、使わないことを原則としてほうがよい」(p.278)。なぜなら、研究的なレポートに必要なのは著者の主観(思い)ではないからである。続けて寺崎氏は「考える」について次のようにいう。「似たことを表現したいなら、「と考える」のほうを使うこと。これも主観的な判断を示す表現だが、同じく判断は判断でも、論理的な推論があつてのことだということを示すからである。」(p.278)

このような指導は、レポートを書く上では少なからずなされることかもしれないが、しかしこれはおかしな話である。論理的な推論があるかどうかは、文末を「思う」にするか「考える」にするかに依ることではなく、提示される前提と結論の関係性に依存することであるはずである。しかしこの話は、上の大野氏の話を踏まえ、かつ、文末の表現が文章の論理性そのものではなく、論理性の「印象」を変えると考えるのであれば、了解することができる。

大野氏がいうのは、「思う」は一つのこと、「考える」は複数のものの比較や構成を含むものであった。したがって、同じ文章であっても、文末に「思う」がついていると、単なる著者の思い(思い込み)の表現ととられてしまう。それに対して「考える」がついていると、実際はそういうこと

をしていなくても、一つの結論を出すのに、あたかも著者が複数の選択肢を比較吟味した結果であるかのような印象を与えることができるのである。本来的には文章の論理性はもちろん、実際にレポート上で複数の選択肢を比較検討してみせることによって示すべき事柄である。したがって寺崎氏の指摘は、レポート作法からいうならば、枝葉末節に近い問題でしかない。しかし、「思う」と「考える」の表現の違いから、我々は大野氏が指摘するような意味の違いを印象として受け取ってしまうことが、この例から理解できよう。

このような例からも、「思う」と「考える」の違いについて大野氏が指摘することは、それなりに納得のいくものである。「思う」と比べたときの「考える」の意味については、大野氏がいうように受け取ってもよさそうである。しかし、それ以外の部分に関して、2つ疑問が生じる。一つは、考えるときに行われている複雑な内的過程としては、比較と構成以外にはないのかということである。もう一つの疑問は、たとえば意思決定を行うにしても、考えずに行うことは可能である。直観的に意思決定することも、慣習的、機械的、デタラメに意思決定すること可能である。ということは、比較を行っていれば考えているといえるわけではないのではないかと、ということである。2点目の疑問に関しては稿を改めることにして、比較と構成以外の思考活動について言及しているものを探してみよう。

3. 言葉探し—「感じる」と「考える」の違いから—

哲学者である西氏は、日常的な事柄を哲学的な観点から深く考えることについて何冊かの本を書いている（藤野・西，2003；西，1998；西・川村，1996；西・森下，1999）。ここでは、『「考える」ための小論文』（西・森下，1999）の記述を中心に、「考える」ことについて西氏がどのように考えているのかについてみてみよう。西・森下（1999）は予備校講師とともに書かれた小論文試験対策のための本であるが、そこで用いられている「考え方」としては、フッサールの現象学の方法である「本質観取」が用いられている。また同

書では、「そもそも考えるとはどういうことか」という点から「考える」ことが根本的に論じられており、本稿のテーマを考える上で有用と思われる。

「考えること」を考えるに当たって筆者らは、先の大野氏と違い、「考え」と「感情」の違いを検討している（なお本稿では5節でも、考えと感情の関連を扱っている）。簡単にいうと感情とは「自分の心の動き」である。それに対して「考え」とは、「もともとは個人の心の動きから生まれてくるものだが、あえて個人の心の動きからいったん切り離れたうえで、「誰でも認めざるを得ないこと」というつもりで主張される事柄」（p.23）であると筆者らは述べる。同書で感情と考えが対比されるのは、同書の題材となっている小論文において受験生が、往々にして感情の表明に終わるような文章を書きがちであるためでもあるであろう。しかしそれだけでなく、「感じ」をさらに掘り下げていくことが「考え」である、と筆者らが考えているためでもあるであろう。そのことについて筆者らは、次のように述べている。

私たちは、かすかにではあるが心を動かされながら生きている。そして、何かしら心が動いているとき、それは何だかもやもやとした、わけのわからない状態としてしか意識されないから、じつは「ことばを失っ」ている状態なのだ。／そういう状態は、人間を不安にさせるものだから、私たちは言葉を探す。考えるというのは、そういう、わけのわからないもやもやから脱出しようとする営みだ。そして、「深く思考する」というのは、性急に言葉を見つけようとしなくて、「もやもや」に何度も立ち戻って、じっくりと言葉を探すことである。（西，森下，1999，p.104。太字は筆者）

すなわちここでは、考えるとは（もやもやから脱出するために）言葉を「探す」こと、と述べられている。西・森下（1999）では、考えを掘り進めて自分なりの物の見方をつくっていくために必要なのは、疑う力、広く生き生きした関心、自問自答の能力の3つが挙げられている。また別の箇

所では、しつこく「問い」をくりかえして考えることが必要、とも述べている。このように、みずからの体験を反省しつつ、そこに当てはまる言葉を探ることによって、その本質を記述する「本質観取」は、西(2001)によれば、ソクラテスをはじめとして哲学に普遍的な、より強く深い思考の方法であるという。

西氏の他書で考えることについて触れられているものとして、『自分と世界をつなぐ哲学の練習問題』(西, 1998)がある。そこには、「考えるということは、自分の問いに明確に向き合うこと」(p.10)と述べられている。同書では、50個ほどの日常的な問いに対して、哲学的に自分の問いに明確に向き合いながら、根本から問うようなやり方で、西氏の考えや考え方が披露されている。検討されている問いは、「どうやって考えていけばいいの」「そもそも事実って何」「世界はみんなにも同じに見えるのだろうか」「資本主義はよい子、それとも悪い子」「他人と「わかりあえない」と思うのはなぜ」「私たちはどこへ向けて問えばいいのか」などである。

実は西氏は、これらの問いに対して、必ずしも西氏本人の「感じ」から出発して考えているわけではない。たとえば「輪廻転生は事実なのか?」という問いに対しては、まず「そもそも事実とはどういうことか?」という問いを立てている。そして、明らかに事実といえる日常の例を考え、次に、明らかに事実とはいえないけれども事実といえそうな例を検討している。最後に、これらとは大きく違う例として「輪廻転生」を扱っているのである。この例をはじめとして、同書で西氏が行っているのは、「そもそも～とはどういうことか」と、なるべく根っこから考えられるような問いを立て、日常の例を考えたり、思考実験として極端な例を考えたり、あるいはそのように考える必要性や意味を考えたりしながら、状況を分類したり、その状況に適切な言葉にすることである。このような作業全体を西氏は、一言で「言葉を探す」と述べているのである。

なお、前節の最後に提起した疑問の二つ目である「同じ行為が考えるにも(あまり)考えないことにもなる、その違い」について、西氏が少し述べている点にも注目しておこう。上に引用した西・

森下(1999)の記述中、太字になっている部分は、「深く」思考することの話であり、それは、「性急に言葉を見つけようとしなさい」で「じっくり」と言葉を探すと述べられている。逆に言うならば、同じ「言葉を探す」行為でも、性急に言葉を見つけるようなやり方というのは、浅い思考と言えるであろう。

4. 耳を澄ます

西氏にとって考えることは、「言葉」を探すと表現されていた。これは、小論文なり本質観取においては、「言葉」を用いて本質を見出すことに焦点が当たっているためであろう。実際には、言葉以外に対しても「探す」ことは行われている。

そのことを、日常の例をいくつか挙げながら検討しているものとして、『はじめて考えるときのよう』(野矢, 2001)を取り上げよう。哲学者である野矢氏は同書において、考えるとは何をすることかについて、いくつかの例を挙げて検討している。野矢氏が検討しているのは、なぜなぞを考えること、変わった形のコップがなぜそういう形をしているかを考えること、女性に向かって「ずっときみのことを考えている」ということ、数学の問題(フェルマーの予想)の証明を考えること、アルキメデスが王冠の体積の測り方を考えたエピソードなどである。特に「なぜなぞを考えること」を例にあげ、野矢氏は、考えることが「耳を澄ますこと」であることを、以下のように述べている。

ぼくは一方になぞなぞをかかえ、なぜなぞの目で文具売り場を歩く。そして目に入ってきたものが答えにふさわしいかどうかチェックする。これは、考えないでただ歩いているのとはぜんぜん違う。／あるいはこう言ってもいいかもしれない。答えの候補が現れたとき、いつでもぼくはそれをつかまえられるように、「チューニング」してるってわけだ。何かか思い浮かんだときに、「これがあの問題の答えかもしれない!」って声が響く。その声に耳を澄ましていること。／集中して考えているときには、それは鋭敏に研ぎ澄まされてい

る。他の声に耳をかさず、すべてをその問題に関係させて、「これだ！」という声を待つ。そういうとき、ぼくたちは「考えている」というんじゃないだろうか。／「考える」というのは、耳を澄ますこと、研ぎ澄ますこと。(野矢, 2001, p.26. 強調は引用者)

ここでいう「これだ！」という声とは、アルキメデスが王冠の体積の測り方を湯船の中で思いついて「ヘウレーカ！」(あ、そうか！)と叫んだような、そういう声を指している。野矢氏は、考えることはその声に「耳を澄ます」ことであると論じている。もちろん、ただ耳を澄ましていればいいわけではない。「答えの候補が現れたとき、いつでもそれをつかまえられるようにチューニングした状態でいる必要がある。チューニングするとは、「すべてをその問題に関係させる」ということである。これは逆に言うならば、われわれがふだん「考えずに」生活しているときは、あることを「すべてと関係」させて捉えてはいない、ということである。日常われわれは、言葉の意味でもものの使い方でも、習慣的に一義的に決めている。そのために、スムーズに言葉を理解し、ものを知覚し、使用することができるのである。

しかし考えるとはそうではない。そのことを野矢氏は、「考えるっていうのは、そうした習慣的な結びつきの網の目から出ていくことだ」(p.33)と述べている。我々が知覚し理解し使用するものの意味は、たいていの一義的に決まっている。あるいはわれわれの行動も、特定の状況でどう行動するかは一義的に決まっていることが多い。われわれの日常とは、そのような一義的な結びつきが網の目のように広がっている世界である。しかし、そのような習慣的な結びつきの網の目から出て、すべてをその問題と関係させて考えてみることで、それ以外の新たな結びつきを探ることが考えることなのである。

この考察は、2節で紹介した「思う」と「考える」の違いとも呼応する。「思い」とは「一つのこと」であった。その一つとは習慣的な結びつきで結ばれている一つのことである。特定の刺激に対して特定の反応をすること(「思い出す」ことも含めて)、と表現することもできよう。それに

対して「考える」は、「複数のこと」を比較したり組み立てたりすることである。そのときには、特定の一つの反応以外のもの、すなわち習慣的に結びついていないものも入ってくる。そういう形で、いつもと違うものを検討することが「考える」ということなのであろう。

5. 思考の進化的意義—感情を制御しシミュレート—

ところで野矢氏は別の箇所で、「考えるっていうことは、そうした見えない枠と戦うことでもある」(p.160)とも述べている。ここでいう「見えない枠」とは、先の「習慣の網の目」であり、それと「戦う」ということは、習慣的でない結びつきを求めるということであろう。それが「戦う」と表現されるのは、習慣的な結びつきをわれわれは強固に持っており、そこから出るということは、戦いを必要とするほど大変なことであり、非日常の営みということであろう。野矢氏は「考えるって、だから、とても不自然なことだ」(野矢, 2001, p.33)とも表現している。確かに考えることとは、スムーズな日常に待ったをかける、とても不自然なものである。

ではこのような不自然なものを、どうして人間は行うのであろうか。その意味を進化論的に考察したものとして、『心をもった機械』(戸田, 1987)がある。戸田氏は、感情があいまいなものでもでたらめなものでもなく、人間が長らく住んでいた野生の環境においては、きわめて合理的に働く、一貫した論理構造を持った「状況別の適応行動選択プログラム」であることを論じている。

しかし、野生の環境で合理的に働いていたものが、現代のような文明環境では必ずしも合理的に働くとは限らない。そこで、場合によっては感情システムを制御する必要が出てくる。そのような制御のための一つの仕組みが「知」と考えられるのである。すなわち「知」とは、「感情」システムを制御するためのサブシステムなのである。戸田氏はそのような知のシステム(人間の情報処理システム)のことを「認知システム」と呼んでいるが、認知システムの位置づけは、進化論的には次のように考えられる。

人間が「認知システム」を持っている最も重要な目的は、「これからどうなるか」という先の「見通し」を立てるため、と考えられる。自分がここでもしこうしたら、結果はどうなるか、ああしたらどうなるか、を考えて、一番結果のよさそうなことを行動にうつすわけである。本当の結果はもちろんやってみるまでわからない。しかし本当の結果を知るために、いちいち実際にやってみていたら、時間も足りないし、たぶん「野生環境」だったら生命がいくつあっても足りないだろう。／だから、「知識」システムのなかから、関連した世界に関する事実やらルールやらを総動員して、もしこうだったらどうなるのか、ああしたらどうなるのかについて「シミュレーション（模擬）」をして、実際にやってみるため危険をおかすことなく「推論」をするわけである。（戸田，1987，p.118。強調は筆者）

ここでは「知」とか「認知システム」という語が用いられており、知的な活動全般を漠然とさしているようにも見えるが、最後に「推論」とあるように、この話は「考える」ことにそのまま当てはめて考えても差し支えないであろう。そして戸田氏は、思考を含む認知システムの最も重要な目的は、「ああしたらどうなるのか」とシミュレーションすることだと考えているのである。そして、そうすることで実際にやってみる危険をおかすことなく最適な行動選択が行うために思考があるわけである。もっとも、いつも同じような環境にいるのであれば、戸田氏がいうように感情という「状況別の適応行動選択プログラム」があれば十分であろう。しかし、野生環境でも今までは異なる状況になったり、あるいは野生環境とは違う環境で行動する場合には、そのようなシミュレーションが必要になる。つまり、環境の変化に適応するために、不自然で非日常的な「思考」を行う必要があるのである。

なお戸田氏は、「考える」という語の意味として「シミュレートする」ことを挙げている。これまでに見てきた論考の中には、考えることのシミュレーション的な側面を指摘したものはなかった。

しかしこういう使い方は、日常ではよく見られることである。たとえば親が子どもに、あるいは先生が生徒に、その子の言動に注意を与えるような意味で「よく考えてみなさい」と言うことがよくある。その場合の「考える」とは、「そんなことをしたらどんな結果になるか、実行する前に頭の中で想像（＝シミュレート）してみなさい」という意味である。シミュレートする際には、比較も選択も構成も言葉探しも耳澄ましも行っていないであろう、しかしこれは、われわれが日常的に多用している「考える」行為なのである。

6. 思考の発達—行動の内面化—

考えることがシミュレートすることであることは、発達心理学者であるピアジェも指摘している。そのことを、『思考の心理学』（ピアジェ，1999）という論文・講演集を元に確認しておく。

ピアジェは、シミュレートという言葉を用いているわけでもない。また、シミュレートすることだけが思考と考えているわけでもない。ピアジェにとって思考とは第一に、内言（話し言葉の内面化）なのである。そのことは、「話し言葉の内面化。つまり、思考そのものの出現。」（p.27）という表現で示されている。これは幼児期の精神発達の特徴について述べたくだりである。しかし、そもそも言葉を持つということは、目の前に存在する現実からわれわれを引き離し、「一つ」ではない世界へといざなうのである。そのことについてピアジェは、次のように述べている。

〔幼児期の知能の変化について〕この変化は、言語行動と社会化という二つの影響の下で、単なる感覚運動的知能ないし実行的知能から、その後、いわゆる思考へと延長されるのである。何よりもまず、言語によって、主体が自分の活動を語るができるので、過去を再構成する能力、したがって、以前の行為に関係していた対象の存在していないときもそれを思い浮かべる能力が、子どもに提供されると同時に、まだ行われていない未来の行動を予期したり、時には、決してその行動を実現することなしに、言葉だけで置き換えたりす

るような能力も、提供されることとなる。これが思考の出発点なのだ。(ピアジェ, 1999, p.32-33)

ここにあるように、言葉を用いることで、過去の想起、未来の予期、そして現実とは違う世界の想像が可能になる。そのように、今日の前で繰り広げられている現実とは違う結びつきを想像することが、ピアジェのいう思考なのである。中でも、「未来の行動を予期」することや、「行動を実現することなしに、言葉だけで置き換え」ることとは、「これからどうなるか」や、「もしこうだったらどうなるのか、ああしたらどうなるのか」とシミュレーションすることそのものといえよう。

しかし幼児期に行える思考は、幼児期以降の子どもや成人が行いえるような、自由自在なシミュレーションとは違う。そのことをピアジェは、「幼児期特有の思考が到達する高次の均衡形式である直観に対応して、七歳以降の思考には操作が存在する」(p.67)と述べている。操作とは内面化された行動、すなわちシミュレーションを行うことである。ただし単に行動が内面化されているだけではない。それは可逆的なものである。つまり、表象の上で行動を逆行することも可能なものがピアジェのいう「操作」なのである。それが可能になるのが児童期の思考の特徴である。さらに11~12歳になると、形式的思考が可能になる。それは、「思いのままに、反省と理論の足場を組むことができるように、思考を現実からひきはなし、解放すること」(p.87)である。すなわち、現実にはありえないようなことまでも考えることができるようになるのである。

ピアジェの思考の発達段階理論を、「シミュレーション」という観点で見ると、それは、乳児期の、言葉や概念によらない感覚運動的な知能の段階を経て、幼児期には曲がりなりにもシミュレーションが可能になり、児童期にはそのシミュレーションが可逆的にできるといように精緻化され、さらにそれが現実から離れる範囲にまで拡大する、という発達になっている。まとめていうならば、より精緻に、幅広いシミュレーションができるようになることが、思考の発達なのである。

7. 暫定的なまとめ

さて、考えることに関する考察がいくつか出たところで、現時点でのまとめを行っておこう。最初にお断りしたように、本稿は、現時点で筆者の視野に入った考察のみを対象とした、試案あるいは覚悟的な性格のものである。したがってここで行うまとめも、暫定的なものとなる。

本稿で扱った「複雑な内的過程の内実」を、『概念「日常表現」(関連しそうな心理学的概念)』という形で挙ると以下のようになるであろうか。

- ・比較「これかあれか」(意思決定)
- ・構成「ああしてこうして」(創造的思考)
- ・言葉探し「そもそも～とは何か」(哲学?)
- ・耳澄まし「あ、そうか!」「これだ!」という気づきを導く思考(問題解決)
- ・シミュレーション「もしこうだったらどうなるのか、ああしたらどうなるのか」(操作)

なお、関連しそうな心理学的概念に関しては、本稿では十分に検討しておらず、とりえず関連しそうと筆者が直感的に判断したものであることをお断りしておく。この点を検討することは、稿を改めて精緻に行われるべきであろう。

8. 各概念の関連

ではこれらの関係はどのようになっているであろうか。この点についてこれまでに述べてきたのは、「言葉探し」を言葉以外にも広げたものが「耳澄まし」ではないかということと、野矢氏が述べている「習慣的な結びつきの網の目」という考えが大野氏のいう「複数のこと」と呼応する、というぐらいである。

そこでまずは、「耳澄まし」と「比較」「構成」の関係について考えてみよう。野矢氏の考察から考えられることは、比較がなくても、構成がなくても、「耳澄まし」的な思考は可能ということである。たとえばなぞなぞの答えを考えると、同時に複数の答え候補を比較するわけではない。

たとえば「子どもがほしがる文房具はなに？」というなぞなぞを考えるときに、複数の文房具（鉛筆と消しゴムなど）のどちらが答えとしてふさわしいか、という比較（「あれかこれか」）は行わない。あくまでも行っているのは、一つ文房具を考えては、それが「子どもがほしがる」という条件に合っているかどうかを照らし合わせる（耳澄まし）、ということの繰り返しである。「構成」も同様であり、なぞなぞの答えを考えるのに、何か新しいものを組み立てているわけでもない。そういう意味では、「比較」や「構成」は、「思考」の一つの形態ではあるけれども、それがすべてではなく、それ以外の形もありうる。しかしそれらの根底には、探索し、耳を澄ますという作業が含まれている、と言えそうである。すなわち、いつもと違うものを探し求め、あるいはいつもと違う関係づけを行っているときは、それがたとえ一つのものであっても、考えているといえる。比較や構成と耳を澄ますことの関係について、野矢氏の考えは以下の記述にみられると思われる。

たしかに、問題を解く道筋は観察と推論でつながっているのかもしれないけれど、それを役に立つか立たないか判断するのは観察でも推論でもない。どの観察と推論を使って、それらをどのようにつなげるか、それを決めるのは、もう論理の仕事じゃない。／そこに、「考える」ということが現れてくる。／問題にとらえられて、「ハウレーカ」の呼び声に耳を澄ます。そのとき、ある観察はぜんぜんきみの心に飛びこんでこないけれど、この観察は敏感になったきみの琴線に触れる。かすかな音がする。いける。いけるかもしれない。／観察や論理は問題を解くときに欠かせない素材だ。だけど、それを問題に合わせて、捨てたり、選んだり、つなげたりしていかなくちゃいけない。「ハウレーカ」の声を待ちながらそんな作業をつづけていく、それが「考える」ってことだ。（野矢，2001，p.91）

観察や論理そのものが考えることなのではなく、それはあくまでも素材に過ぎない。さまざまに可能な観察や論理の中から、問題に合わせてそれら

を比較し、取捨選択し、組み立てることが考えること、というわけである。この考察からすると、比較や選択、構成といった作業の根底に、「耳を澄ませながら探す」ことがあるといえそうである。

では、シミュレーションはどういう位置づけにあると考えられるであろうか。ちょっと考えてみる限りでは、あらゆる思考においてシミュレーションが行われているというわけでもなさそうであり、なかなか難しそうな問題である。とりあえずここでは、考えられることをいくつか、断片的に指摘しておくにとどめておく。まず、複数の選択肢を「比較」して一つを選ぶという意思決定時の思考には、必ずしもシミュレーションは必要なさそうである。もちろん、商品購入後の自分を想像（シミュレート）することで、複数の選択肢のどれがよいかを選ぶという選び方もあるであろうが、条件Aに関しては一方の選択肢が優れており、条件Bと条件Cにおいては他方の選択肢が優れているので、総合的に考えて後者を選ぶ、というような決定を行うのであれば、シミュレーションの出る幕はなさそうである。

一方、「構成」を行うということは、「ああしたらどうなるのか」とシミュレーションしながら考えているのではないだろうか。すなわち構成にシミュレーションは不可欠といえそうである。「言葉探し」においては、3節で例に挙げたのは、自分が日常的にある事柄をどのように捉えているのかを考え、少し違う状況や極端に違う状況で自分の捉え方を考える、というような思考である。それはすべてをシミュレーションという一語で表現できるのかどうかはわからないが、シミュレーション的なものが少なからず含まれているようには思える。「耳澄まし」については、あまり明確なことを述べることはできない。たとえば、先に挙げたなぞなぞ（子どもがほしがる文房具）の答えを考えるときには、「消しゴムは子どもがほしがる文房具といえるだろうか？」「鉛筆はどうだろうか？」というように考えるであろう。場合によっては状況を思い浮かべたりするかもしれない。そうであれば、それはシミュレーションと言えるかもしれない。しかしこのなぞなぞに関していうならば、言葉遊び的ななぞなぞであるので、必ずしもシミュレーションを行わなくても答えは出せるの

である。ということで、シミュレーションと他のものに関しては、関係がありそうだけれどもはっきりとはいえない。ということは、ひょっとしたら「シミュレーション」というまとめ方が不適切なのかもしれない。この点は今後さらに考えていくべきであろう。

9. 教育上の示唆

次に、考えることと教育の関連を考えておこう。この点については、本稿の主目的からすると蛇足的な内容ではあるが、しかし本稿冒頭に述べた問題意識として、考える力を育成する教育のためにも考えることについて明確にする必要があることを述べているので、ここまでの議論から言えそうな範囲のことを述べておく。

比較や構成などの思考は、習慣的な結びつきの網の目は異なる複数のものを扱うということであった。このことからするならば、思考力を育成する教育においては、第一に、習慣から離れるという不自然なことを扱うということ、教師も生徒も心得ておくことが必要であろう。そしてその上で、複数の選択肢を思いつき、複数の組み合わせを思いつくような柔軟さが必要であろう。

思考がじっくり言葉を探すことであるという西氏の示唆からは、性急に言葉を見つけようとしないうで「じっくり」と探すことが必要であるといえる。それには、物理的に十分な時間を用意することも必要であろう。しかしそれだけではなく、しつこく問いを繰り返し、考えを掘り下げていくことの必要性を知るとともに、そうすることがよりよい考えにつながることを体感することが必要であろう。

思考が耳を澄ますことであるという野矢氏の示唆からは、すべてをその問題に関係させ、耳を澄ましつつ考えることの必要性がいえる。それは、ありうる関係を頭の中でさまざまに結んでみるという、可能性の探索作業になるであろう。小さい子どもでもなぞなぞを考えたり解いたりすることができる。ということは、耳を済ませることは本来誰にでもできるということであろう。しかし、習慣の網の目から大きく隔たるような場合や、知識の少ない領域のように、さまざまな可能性を探

索することが難しくなる場合がある。そういうときに、いかに探索を行い、いかに耳を澄ますか。そこには教育が介在する余地があるかもしれない。

思考がシミュレーションであるという戸田氏やピアジェの示唆からは、幅広いシミュレートを可能にする関わりが必要であるといえる。シミュレーションが行動の内面化であることを考えれば、まずは現実世界で実際の行動をさまざまに体験することや、そのような体験を振り返って考えることが、より豊かなシミュレーションにつながるのではないかといえる。

ここで述べたことは、具体的な教育を想定せずに、本稿で扱った考察から直接考えられることである。実際にこのような示唆をどのように具体化するかは、実際の実践を通して考えていくべき事柄であろう。

10. 本稿に欠けているもの—問いの思考—

最後に、本稿で取り上げた概念が、果たして考えることをどれほどカバーしているのかについて、可能な範囲で検討しておこう。もちろん各論者は、特に限定をつけることなしに「考えること」(思考)について論じていた。したがって各論者は、それが思考の少なからぬ部分をカバーしていると考えて論じていることであろう。しかし本稿からも明らかになったように、たとえば比較や構成が明示的に現れない思考も存在する。このことからすると、これまでに出てきたもので単純に思考をすべてカバーしていると考えられるかどうかは分からない。もっとも、すべてをカバーしていることを証明することは、かなり困難な仕事であろう。ここではそうするのではなく、考えることについてある人が列挙した内容と、本稿で見えた5つの観点を照らし合わせてみることにする。

ここで取り上げるのは、『考えることの教育』(佐伯, 1990)の記述である。佐伯氏は、考えることを「答えを出すこと」と「吟味すること」に分け、後者の重要性を論じている。その中で、さまざまな吟味のあり方を列挙しているのである。

私たちは、問いに対して答えるばかりでなく、時に事柄を「吟味する」ことがある。話され

ていることばの意味を考えたり、話されている内容に矛盾がないかを調べたり、自分の経験に当てはめてみたり、話された内容と同じことを意味する別の例を考えたり、話された内容そのものを何か別のことの例として位置づけてみたり、比喩や隠喩（メタファー）で表現し直してみたり、話された内容を否定すると世の中はどうなるのかと考えてみたり、話し手が想定している前提が何かを考えてみたり、結局はどういうことになるのかと要約してみたり、重要なことと重要でないことを色分けしたり、話された内容を真実とみなすと、次にどんなことが問題になるかをさぐってみたり、話された内容を自己流に言い直すとういうことになるのかと考えてみたり、話された内容を否定するような観点やものの見方は存在しないかと考えたり、なぜ話し手がそのような話を今この時点でしたかについて、話の文脈や談話の流れをさぐったり、話し手の動機、意図、計画をさぐったり、さらにそのような意図や計画の背後にある社会の歴史や文化がどのようなものかと考えたり、……数えればきりがなくであろう。（佐伯、1990、p.23-24）

ここではひとつひとつの記述を細かく検討することはしないが、ここに書かれていることは、比較、構成、言葉探し、耳澄まし、シミュレーションという観点で、明らかに問題なく説明できるかどうかは微妙であるが、少なくとも明らかに全く説明できないものはないように筆者には思われる。しかしここには、ここまで「考える」ことを検討してきた筆者にはない視点が見受けられる。それは、問いに答えるのではない思考、という観点である。それは「問いを立てる」思考、とでも呼べるであろうか。

考えてみると、これまでに本稿で扱ってきたのは基本的にはどれも、すでに存在している何らかの問いに対して向き合ったときに行われる事柄であった。どのようなタイプの思考が必要かは、どのような「問い」が立てられているかによって違ってくる。一つに決めるのであれば比較、新しいものを作るのであれば構成、なぞなぞなどの問題を

考えるのであれば耳澄まし、という具合である。しかし、たとえばある文章を目の前にして、そこに立てる問いは、佐伯氏も述べるように無数にある。どのような問いを立てるかによって、その後どのような思考が行われるかが異なってくるであろうし、その文章をどのように理解するかが異なってくるであろう。しかしそのような、問いを立てる思考については、本稿では明確に扱っているとは言いがたい。

もっともそれは、本稿で引用した論者が問いを立てる思考について考えていない、ということは意味しない。野矢氏は本稿で最初に引用した箇所（野矢、2001、p.26）と2番目に引用した箇所（p.91）の間で、問題を考えることは問題そのものを問うことであることを論じている。しかし本稿で最初に引用した箇所に関しては、なぞなぞに答えるようなタイプの思考がもっぱら扱われていたため、本稿では問いを立てる思考については言及できていない。また、西・森下（1999）は哲学的思考がベースにあるということもあり、みずから問題を提起して考え進めていくことや疑うこと、自問自答することは重視されている。しかし、同書自体が小論文をターゲットにしている関係上か、小論文において出された問いに対する答えという形が中心となっているようである。このような理由もあり、少なくともここまで論じてきた筆者の視点には、「問いを立てる思考」は明確には含まれていなかった。

では問いを立てる思考とはどのような思考なのか。そのことについて考察されているものとして『思考のための文章読本』（長沼、1998）がある。長沼氏は、「ひとは、答えのある問いに限って思考するわけではない」（p.130）と述べ、問いの思考について論じている。問うことについて長沼氏は、「疑問文を作ることではない」「疑問文だからといって問いであるとは限らない」（p.133）と、単に疑問形にすることと問いの思考を区別する。むしろ問いと関係があるものとして、「感嘆」「感動」「驚き」を挙げている。答を求める思考が「疑問」から始まるのに対して、問いの思考は「驚き」から始まるというわけである（自分の心の動きや感じを深く掘り下げることが思考、と西・森下（1999）が述べていることも、これと同じで

あろう)。

問いの思考とは、驚きなどを手がかりにして、すでにあるものから問いを引き出すことであるが、その一例として長沼氏は、芸術批評を挙げ、以下のように述べている。

芸術作品にむかって批評する時の思考とは、すでに作品としてあるもののまゝで、さまざまな問いを引き出すことなのではなかろうか。問いから答を生み出す教育的・問題解決型の問いとは異なる、むしろ、自明の答えから問いを創造すること——「いまだかつて問われなかった」ものを問う値打ちのあるものへともたらずこと(ハイデガー)を、もう一つの思考の課題としたいのだ。(長沼, 1998, p.134)

このことを十分に検討する余力は現在の筆者にはないが、いくつか考えられることを述べておく。まず、問いの思考は上記引用にあるように批評(あるいは批判的思考)の基本的な形といえる。しかし問いの思考に必要なのは批評だけではない。現在すでに存在するもの(長沼氏の言う「自明の答」)に対して新たな問いを見出すこととは、長沼氏が言うように創造的な行為である。ただし創造といっても、2節で扱ったような「ああしてこうして」という構成的な意味での創造ではないであろう。「ああしてこうして」と組み立てるのは、すでに存在する問いに対して答える営為である(大野氏が構成の例として挙げているのが「今夜のごはんの献立を考える」であることを思い出せば、このことはお分かりいただけよう)。それに対して長沼氏が言っているのは、自明のところ問いを見出す、というタイプの創造である。つまりまとめると、問いの思考とは創造と批判の両方が関わる行為である。このことは、批判的思考を考える上で重要なものといえそうである。

また、思考を「問題解決型の思考」と「問いの思考」とに分けて考えた場合、心理学でもっぱら

扱われてきたのは、筆者の知る限り問題解決型の思考(あるいは問いから答を導く思考)であった。今後の課題として、問いの思考が心理学その他の分野でどのように扱われてきたのかを明確にすること、そしてこれからどのように扱おうのかを考えるべきであろう。

引用文献

- 藤野美奈子・西 研(2003) 考えることで楽になろう メディアファクトリー。
- 市川伸一(1996) 心理学における思考研究 市川伸一(編) 認知心理学 4 思考 東京大学出版会, Pp.1-13.
- 大野 晋(1999) 日本語練習帳 岩波新書。
- 長沼行太郎(1998) 思考のための文章読本 ちくま新書。
- 西 研(1998) 自分と世界をつなぐ哲学の練習問題 NHK 出版。
- 西 研・川村 易(1996) 哲学のモノサシ NHK出版。
- 西 研・森下育彦(1999) 「考える」ための小論文 ちくま新書。
- 野矢茂樹(2001) はじめて考えるときのように PHP エディターズ・グループ。
- ピアジェ, J. 滝沢武久(訳)(1999) 思考の心理学—発達心理学の6研究— みすず書房。
- 佐伯 胖 1990 考えることの教育—教育のヤラセ主義を排し考えることの教育とは— 国土社。
- 繁樹算男(1999) 意思決定 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司(編) 心理学辞典 CD-ROM 版 有斐閣。
- 寺崎昌男(2002) 大学教育の可能性—教養教育・評価・実践 東信堂。
- 戸田正直(1987) 心をもった機械—ソフトウェアとしての「感情」システム— ダイヤモンド社。